

## オルタナティブな上映の場であるために——あいち国際女性映画祭2010

大竹 瑞穂

2010年9月8日から12日までの5日間にわたって開催された、あいち国際女性映画祭2010について紹介したい。今年で15年目を迎えるあいち国際女性映画祭は、東京国際女性映画祭と並んで日本における二大女性映画祭の内の一つであると同時に、愛知県唯一の国際映画祭である<sup>1</sup>。

あいち国際女性映画祭の最大の特徴は、男女共同参画社会財団の自主開催事業として、男女共同参画社会の実現のための拠点であるウィルあいちで開催されることにある。そのため、同映画祭では、女性監督の制作支援と、女性と関わる社会問題をテーマとした作品の上映という、二つの社会的意義を意識した構成となっている。

最初に、女性監督の制作支援に対する取り組みについて紹介したい。あいち国際女性映画祭では、女性監督の作品を上映するだけでなく、女性監督の映画制作に関わる講演やシンポジウム、イベントを毎年開いてきた。今年は、ソウル国際女性映画祭と連携し、日韓の若い女性監督による短編映画の上映と、シンポジウム「ソウル国際女性映画祭にみるアジアの新進女性監督」が開催された。更に、韓国から招聘された短編映画の監督が、一般の応募者とともに映画を制作するワークショップも行われている。

今年の特別企画である短編映画の上映は、劇場公開用の長編を制作する前の、若手映画監督の支援と位置づけられている。韓国からは、ソウル国際女性映画祭で上映された短編の中から7作品が上映された。国内からは、文化庁の委託事業である「若手映画作家製作プロジェクト」の支援により制作した3人の監督の短編が上映された。「若手映画作家製作プロジェクト」とは、NPO法人

VIPO（映像産業振興機構）の事業であり、長編映画の制作経験のない在野の監督に、ワークショップを通じて映画制作の技術等を磨き、一定の予算とスタッフをつけて映画を制作する機会を与えるものである<sup>2</sup>。おそらく、このように若い世代の支援が重視される背景には、製作委員会方式のブロックバスター映画の増加とシネマ・コンプレックスの普及という1990年代以降の日本の映画産業の構造変化によりミニシアターが減少し、低予算で映画を制作する若い監督の発表の場が限られてしまうという状況がある<sup>3</sup>。

この点で、あいち国際女性映画祭は、オルタナティブな上映を支援する場としても機能しており、結果として、あいち国際女性映画祭では、ドキュメンタリーなど普段上映されにくい作品が中心に上映されることになった。同映画祭の存在は、愛知県内でシネコン以外の映画文化を活性化する機会を与えているという点で、今後ますます貴重になると感じた。

あいち国際女性映画祭のもう一つの大きな意義は、女性を取り巻く社会問題と関わる映画を上映し、それについて観客自身が考える機会を提供することにある。これを支えているのが、上映後に会場で観客が映画の感想を語ったり、監督やスタッフ、キャストに質疑応答をするティーチ・インである。今年の映画祭では、女性のキャリア、夜間高校での教育、満蒙開拓や植民地支配の歴史、家族、障害者の文化、先住民族と女性の貧困、若い世代を取り巻く問題など、非常に多岐にわたる問題を扱った作品が上映されたが、そのどれもが強烈に訴えかける力のある作品ばかりであった。上映された作品の多くでティーチ・インが行われ、作品の背景についての質疑が活発に行われた。

あいち国際女性映画祭のコミュニケーションの場としての性格を物語るような出来事が起こったのが、『母の道 娘の選択』（我謝京子、2009年）のティーチ・インである。この映画は、監督を中心とした3世代の女性と、海外で働く女性たちのインタビューを中心に構成されている。ティーチ・インでは、この映画に触発されて、子を育てながら働くために職を替えざるを得ない日本の現状など、自らの経験を元に語る観客が多かった。年配の女性が多いという同映画祭の客層を反映し、監督より上の世代の立場からの発言が多いなかで、ある若い観客が、異文化で育った経験を辛い思いも含めて子供の立場から英語で語った瞬間は、私にとって、この映画の上映に立ち会えた事を幸福に思う瞬間であった。それは、監督の判断で翻訳されなかったが、だからこそ彼女の思いが英語でしか語り得ない経験であることが会場内にひしひしと伝わった。このように、映画を見て語ること、そして、自分とは異なる他者の経験や文化に思いをはせること。これこそが、同映画祭の魅力であり、社会的意義ではないか、との感慨を得た。

以上、あいち国際女性映画祭には、若手の女性監督の支援のみならず、オルタナティブな映画を上映し、考え、語る場を提供することで、自らの経験とは異なるジェンダーの多様なあり方を知るという社会的意義があることを述べてきた。ここで、私があいち国際女性映画祭に参加して感じた若干の問題を述べたい。それは、観客層に偏りがあり、学生を含めた若い世代の参加が少ないというということである。

私と同世代の観客が参加しないことが問題なのは、映画祭の作品の多様性が失われる可能性があるからである。映画祭の作品の選定基準は、作品の質と社会的意義であるが、その作品のテーマが映画祭の客層にとって「わかりやすい」ものかどうかということも選定の段階で問題になるという<sup>4</sup>。つまり、映画祭の客層に合わせて、今後の上映に偏りやタブーが出来てしまう可能性もあるのだ。

映画祭では若い世代の観客向けと考えられる企画もある。若い世代の監督をお呼びして、ワークショップやトークサロンを開いたのは、その一例と言える。また、個人的に若い世代にも見てほしいと感じた作品も多い。例えば、赤面症で思い込みの激しい女性教師と、意見をはっきりと述べたためにクラスでいじめを受ける中学生の“共闘”を描く『ミスにんじん』（イ・ギョンミ、2008年）。



この作品からは、主流の女学生の文化に上手く馴染めなくても開き直って生きようという監督の若い世代に向けたメッセージを強く感じた。異なる世代、異なる経験を持つ観客が、作品との、そして他の観客との出会いを求めて能動的に関わることを通じて、女性映画祭が「わたしたち」の映画祭であることを実感できるのではないかと考える。

では、同世代の観客の参加をうながすために、私たち学生には何が出来るであろうか。ここでは、二つのことを提案したい。一つは、ブログなどを通じて、愛知県内で開催される映画祭や映画に関わる数々のイベントを集約的に発信することで、映画祭に関心のある潜在的な観客を掘り起こすことである。愛知県内では、多くの映画祭や映画に関わるイベントが行われているが<sup>5</sup>、それぞれの情報が個別に発信されているため広い範囲で共有されていないのではないかと考えるからである。もう一つは、大学での授業などと連携することである<sup>6</sup>。私自身は、大学教育の場でオルタナティブな上映文化を学んだが、これは映像専攻ゆえの特殊な経験といえる。シネコン文化しか知らない学生がオルタナティブな映画文化の楽しさを知るためには、作品と参加の仕方の解説が必須であろう。情報リテラシーを目的とする授業で、既存のメディアを批判的に分析することだけではなく、オルタナティブなメディアの探し方を学ぶことも必要であると思うし、

そのような授業の終了後に許可を得て、映画祭を含めたイベントの宣伝をするという形であれば、私たちのような学生でも実行可能である。

もちろん、自ら歩いて情報を探すべきだという考え方もあるだろう。しかし、映画祭には、単にシネフィルだけではなく、より広い観客を対象に、ジェンダーの違いも含め、異なる文化に触れる公共の場を提供するという意義があるのではないか。オルタナティブな文化の存続のためには、参加する観客の側の活動のあり方が問われているともいえる。

1

愛知県内で今年開催されている映画祭としては他に、難民映画祭(10月9～11日)、栄芸術映画祭(3月20・21日)等があるが、少なくとも国外から監督を招くことができるだけの規模を持つ国際映画祭は、あいち国際女性映画祭が唯一である。

2

NPO法人映像産業振興機構 公式ホームページ〈<http://www.vipondjc.jp/about/index.html>〉(2010年10月27日参照)

3

石坂健治によると、シネコンの進出により地方で上映される映画の多様性が圧迫されているという危惧と、郊外型シネコンの進出に代表される地方都市の空洞化に対する危惧から、地方自治体とミニシアター、商店街などが協力することで始まったのが、地方での公共上映の場を考えるコミュニティ・シネマ運動である。石坂健治「公共上映とコミュニティ・シネマ運動の行方——映画上映ネットワーク会議2004 高知 参加報告」『映像学』73号、2004年11、108-114ページ。

4

あいち国際女性映画祭ディレクターの木全純治氏(2010年10月22日の筆者によるインタビュー)、映画祭事務局の稲垣智子氏(同月同日の筆者によるインタビュー)に、それぞれ個別に確認した。

5

例えば、今年の9・10月の2ヶ月に限っても、あいち国際女性映画祭の他に、あいちトリエンナーレの映像プログラム(9月28日～10月10日、愛知芸術文化センター)や、映画『ようこそアムステルダム美術館』を題材に、芸術と市民参加を考えるトークイベント「アートって誰のもの？」(10月2日、ATカフェ)、それぞれの家庭に眠るフィルムを持ち寄って上映することで地域での映画保存を訴えるホームムービーの日(10月16日、文化のみち榎木館)がある。また、愛知県での学生の発信の場として円頓寺映画祭(11月12・13日)がある。

6

そのような試みの一つとして、2007年のあいち国際女性映画祭では、学生が映画を見てジェンダーについて議論するトークイベント「映画の中のジェンダー～学生たちの視点～」が行われた。